衝突と分裂、あるいは融合

二〇二二版一稿 一月二四日 黒澤世莉

八場　一〇〇分

登場人物　一三人　男六人　女七人

じじい　八〇代男性
パパ　五〇代男性
ママ　五〇代女性
おじさん　四〇代男性
イチコ　二〇代女性
ニコ　二〇代女性
サンコ　一〇代女性
ばばあ　八〇代女性
ナカコシスズ　二〇代女性　研究員。北陸出身。専攻：応用物理学
シマテツオ　二〇代男性　研究員。新人。関西出身。専攻：理論物理学
ドウモトセイジ　二〇代男性　研究員。一期生。東京出身。専攻：機械工学
クドウスミ　二〇代女性　研究員。東北出身。専攻：電子工学
ナマリトク　四〇代女性　管理職。東京出身。専攻：量子物理学
ギンザヨウスケ　三〇代男性　研究員。一期生。東京出身。専攻：流体力学
ササバルリン　三〇代女性　小学校教師。九州出身。
ヤマダキンシロウ　三〇代男性　国会議員。関東出身。

じじいとテツオ、キンシロウとギンザ、ママとばばあは、一人二役が望ましい。

序幕

二一世紀初頭、晩夏の夜。日本のとある地方都市。車庫と庭のある二階建ての民家。自家用車を二台維持できる程度の経済状況の、ありふれたリビングルーム。生活感が感じられる範囲でよく片付いている。家族が帰ってくる。みな喪服を着ている。

じじい　腹が減ったな。ばあさんはどこじゃ。
サンコ　おじいちゃん。おばあちゃんの葬式だったでしょ。
じじい　ええっ。
おじさん　寿司たらふく食ったろ。
じじい　メシはまだかね。
おじさん　聞けよ、オヤジ。
パパ　はい、いま支度しますね。

パパ、ママとおじさんにビールとおつまみ、じじいと娘たちに軽食とスイカ、麦茶を用意し、あたりを片付ける。サンコ、手伝う。

ニコ　（おじさんに）シカトされてやんの。
イチコ　十年ぶりだっけ。
おじさん　誰か結婚しないのかい。
イチコ　それ、絶対よそで言っちゃダメ。裁判で負けるから。
おじさん　きついなあ、ニコちゃん。
イチコ　わたしイチコですー。
じじい　ええっ。
イチコ　こっちのブスがニコ。
ニコ　はあ、裁判で負けるのそっちだろ。
イチコ　ブスにブスって言って何が悪いんですかブス。
ニコ　死刑執行。（イチコに躍りかかる）
おじさん　（イチコとニコの間にうまく割って入って）目潰しと急所は反則、オーケー。
イチコ、ニコ急所はない。
じじい　ええっ。

パパ　あんたたちも手伝って。
イチコ、ニコはーい。

遠くから爆発音が聞こえる。一発、二発、三発。

じじい　何の音じゃ。
ママ　花火ですよ。
じじい　ええっ。
イチコ　ああ、今日だっけ。
ニコ　しまったー間に合ったじゃーん。
サンコ　ニコちゃん彼氏ですか。
ニコ　ああー、でもしゃーねーか。
イチコ　当たり前でしょ。
ニコ　妬むな社畜。
おじさん　イチコちゃんお母さんに似てきたね。（濡れ縁に出て、音のする方を見る）
イチコ　最悪。
おじさん　あれ、見えなくなってる。
ママ　お向かいさんがマンション建てちゃったからねえ。
サンコ　でもよーく見てると。

一同、濡れ縁に出て、よーく見る。

おじさん　おおっ。
サンコ　ね、ちょっとね、ちらっとね。
おじさん　もはや花火なのか火花なのか。
ニコ　あの花火を、きっとあいつも見て（イチコにどつかれる）ぶっ殺すぞ。
イチコ　よくどつかれたなあって、ばあちゃんに。
ニコ　だからって、どついてんじゃねえ。よ。

間。

じじい　タロウとジロウはどうした。
パパ　ここだよ。

おじさん　オレだよ、息子のジロウだよ。
じじい　ええっ、なにをされてる方なんですか。
おじさん　なに驚いてんだよ。今はですね、正義の闘士をやっております。
じじい　それはそれは、わたしもよく食べます。
ママ　いまも新聞に書いてるの。
おじさん　めっきり干されましてね、ネットで主要メディアが取り上げないようなことをスクープしております。
イチコ　うさんくさい。
パパ　オヤジは保守的なのにねえ。
おじさん　コンサバな家で息苦しく育ったからだろうねえ。
パパ　オレはまともに育ったぞ。
おじさん　あーあー。
サンコ　あんまりいじめちゃダメだよ。
ニコ　お年玉払えるようになってから来てよ。
イチコ　酒だけ飲んで帰るなよ。
おじさん　サンコちゃんだけだな、かわいいのは。

じじい、ママに抱きつく。

ママ　ギャー。おじいちゃん。落ち着いて。
イチコ　ママもねー。
じじい　すまない。すまない。すまない。わしは、間違ってしまった。正直に言えばよかった。やめてしまえばよかった。
ママ　お母さんじゃないですよ。
おじさん　大丈夫だよオヤジ。生きてるだけで丸儲けだ。
じじい　どこで、どこで間違えた。なにを間違った。
パパ　最近こうなんだ。オヤジはよえらいよ。息子二人を立派に育てて。家も建てて。仕事だって立派なもんだ。
じじい　変えられるんじゃ。変えたんじゃ。わしが日本を救ったんじゃ。
イチコ　また仕事の話か。
ニコ　仕事人間め。おじいちゃんスイカ食べよ。
パパ　あんまり食べさせちゃダメよ。
サンコ　わたし聞きたいな。

ニコ　サンコ、おかしい。
イチコ　すでにババア化してるな。
サンコ　わたし聞いたことないもん。
じじい　ええっ。
イチコ　絶対聞いたことあるって。
ニコ　いっつもその話だもんね、他に話題はないのかと。
じじい　ええっ。
サンコ　覚えてない。
パパ　そうか、サンコが小学校に上る前だもんな、同居してたのは。
サンコ　ほらね、聞かせて。おじいちゃんが日本を救うはなし。

一場

一九六三年、真夏の未明。日本のとある地方都市。長い海岸線と広い松林の近くにある、原子力の研究機関。ドーム型の動力試験炉に隣接して建てられた、真新しい鉄筋コンクリート四階建てのビルディング。計測機や操作盤で壁がうめつくされている制御室内。ナマリ、ギンザ、スミ、ドウモトがいる。

スミ　お母さんとこに「原子力万能薬」ってのの宣伝が来たんだって。
ドウモト　なにそれ。
スミ　原子力で万病を治す、て触れ込みで、ご要望とあらば原子核と中間子の見本を送ってくれるっていうの。郵便で。
ドウモト　なにそれ見たい。
スミ　お母さんに頼んどこうか。
ドウモト　すげえな、中間子の見本て。
スミ　そろそろ汽車の切符を取ろうと思ってて。
ドウモト　ごめん。外せない会合があって、組合の。
スミ　そう。なんだ。
ドウモト　ごめん。詰めたいレポートもあるから。
スミ　うん。
ギンザ　班長。
ドウモト　正月には。

スミ　うん。お墓参りも。
ドウモト　ああ。
ギンザ　班長、起きてください。
ナマリ　はい、なにかな。
ギンザ　寝ないでください。
ナマリ　寝てないよ。寝たことなどないよ。
ギンザ　勤務時間中の私語が多すぎであります。
ナマリ　ああ。
ドウモト　すまんね。
スミ　ごめんなさい。
ドウモト　（スミに）だから、やめとけって。
スミ　でも全然時間がないから。
ギンザ　またはじまったよ。どういう了見だ。
ドウモト　仕事はしている。
ギンザ　当たり前田のクラッカー。今何やってるんだ、ぼくたちは。
スミ　臨界出力試験です。制御棒を抜いて出力を限界値まで上げます。
ギンザ　一歩間違えば、超臨界で大爆発だぜ。
ナマリ　まあまあ、ギンザくん。若いって、いいね。
ギンザ　班長がそんなだから、ぼくにお鉢が回ってくるんでしょう。事故が起きてからじゃ遅いんですよ。
ナマリ　そんなことになったら、この研究所もおジャンだなあ。
ギンザ　なんで楽しそうなんですか。
ナマリ　あれ、楽しそうに見える？　進駐軍に虎の子のサイクロトロンを壊せって言われたとき、仁科のオヤジは泣いてたなあ。
ギンザ　だから、なんで楽しそうなんですか。
ナマリ　悲しいんだよ。日本の原子物理学はあれで二〇年遅れた。またあんなことが起きたら、はい、それまでよ。だね。

スズ、テツオ、入場。

スズ　異常なしです。
ナマリ　ご苦労さん。
テツオ　異常なしです。

スズ　テツオくんとはじめて出たんですけど、びっくりしちゃった。ぜんぜん頼りにならなくって。すぐ大声出して。

テツオ　常に緊張感を持って何事も見逃すまいとしたら、つい。

ギンザ　いい心がけだ。

スズ　花火も苦手なんじゃない。

テツオ　花火は好きです。

スズ　ほんと。じゃお盆の花火、一緒に行こうか。

テツオ　ええっ。

スズ　ウソよ。もうドウモトさんと約束しちゃったから。

間。

スミ　聞いてないんだけど。

ドウモト　みんなで行こう。

テツオ　行きたい。

スミ　いい。

ナマリ　そうか、スミくん、残念だなあ。（ドウモトに）ダーリンと娘を連れてご一緒していいかな。

ギンザ　ドウモト。

ドウモト　誤解だよ。

スミ　外せない会合って、デートじゃない。

ドウモト　会合もある、独身寮の運営について——

スズ　みんなで行くつもりだったんですよ。

スミ　こそこそこそこそ、こそ泥。

スズ　けっこう堂々とやってますよ。

ギンザ　仕事にもどれ。

スズ　やってます。わたしこの二年間、一回もミスしてませんよ。

スミ、やにわにスズを突き飛ばし、スズは機材にぶつかる。ドウモト、ギンザ、間に入る。テツオ、間に入ろうとうろうろとするが、タイミングが掴めない。そのうちあきらめて計器の確認に集中する。

スズ　何すんのよ、壊れたらどうすんの。

ギンザ　止めろ。
ナマリ　まあまあまあ。
スミ　選んで。
ドウモト　え。
スミ　この場でわたしかあの女か選んで。
ドウモト　そんなの、決まってるだろう。
スミ　何が決まってるの。
スズ　機材が壊れたらどうするのかって聞いてるの。
スミ　うるさいよ。
スズ　機材を何だと思ってるの。
ナマリ　まあまあまあ。
ギンザ　班長何とかしてください。
ナマリ　何とかって言われてもねえ。
ギンザ　責任者でしょう。
ナマリ　分かっちゃいるけど止められない。
スミ　（ドウモトに）さあ、選んで。
ドウモト　（スミに）分かった、出よう。
スミ　だめ。
ドウモト　迷惑だろう。
スミ　いますぐ答えれば解決するじゃない。
ドウモト　この場が丸く収まるとは思えない。
スミ　この期に及んで丸く収めようとはバカにしすぎじゃないかしら。
ギンザ　出て行け。
ドウモト　（スミに）出よう。
ナマリ　みんなで散歩しよう。夜のビーチでスーダラ節を歌いましょう。
スミ　黙ってて。
ナマリ　ギンザくん、ほら、手伝って。
スズ　わたしは被害者です。出ていく理由がありません。

ナマリとギンザは、ドウモトとスミとスズを半ば押し出すように出て行こうとする。

テツオ　あの、みなさん。

ナマリ　テツオくん、あとを頼むよ。
テツオ　待ってください。
ナマリ　大丈夫大丈夫、すぐ帰ってくるから。
テツオ　炉心温度が千度を越えています。

間。全員が一斉に炉心温度計を確認する。

ギンザ　どういうことだ。
スズ　炉心温度、核分裂反応、ともに規定値を大幅に越えています。
スミ　さっきまで予定通りだったのに。
スズ　また計測器の誤作動かな。
スミ　実際にこんな高温なら、警報が鳴るはず。
スズ　いや、警報の故障の可能性もある。
スミ　それは——最悪の事態を想定すると、この数値は正しい。
ドウモト　ぼく現場を見てきます。
テツオ　ぼくも——
ナマリ　（全員が動き出そうとしたところを静止して）止まれ。落ち着け。まず深呼吸だ。（間）仁科のオヤジと冬の八甲田山に登ったときなんだけどね。
ギンザ　いまそんな話を聞いている場合じゃ、
ナマリ　危うく死にかけた。吹雪になって、オヤジとはぐれたんだ。吹雪ってのは視界を奪うんだね。真っ白の世界で無闇矢鱈に走り回ったら、崖に落ちちゃってね。幸いオヤジに発見されて事なきを得たけど、あと三〇分遅かったら、凍傷で足の指が無くなってたそうだ。でも、ラッキーだったね。もし吹雪が止まなければ、もしオヤジの見当が外れていたら、そのままあの世行きだったかもしれない。戻ってみれば、おかしいんだよ。わたしが崖だと思っていたのは崖でもなんでも無い、階段二段分くらいの、ちょっとしたくぼみだったんだ。おまけに本道まで一メートルと離れていなかった。パニックは怖いね、そんなこと全然分からなくって、自分は深い谷底に落ちて、何百メートルも離れてしまったって思い込んだんだから。深呼吸をするんだ、一度すっぱり死んだ気になってあきらめろ。わたしたちがこの村を救うんだ。

全員、深呼吸をする。

ナマリ　さあ、やろう。ギンザくん、状況を整理してくれ。

ギンザ　はい。炉心温度が異常に高くなっています。このままでは燃料が溶けるか、炉心が爆発するか、なんらかの大事故につながる可能性が高い。まず原因を調べ、それから解決策を検討しましょう。

ドウモト　緊急停止装置は。まず臨界を止めないと。

スミ　まず制御棒をすべて戻すべきだと思います。

スズ　賛成。炉心温度の上昇原因は超臨界なんだから、臨界を止めればいい。

テツオ　ぼくも賛成です。

ギンザ　班長、よろしいですか。

ナマリ　よし、ドウモトくん、制御棒を全挿入だ。

ドウモト　はい。制御棒全挿入、開始。

ギンザ　もしも入らなかったら。

スミ　そうしたら緊急停止ですね。

間。

ドウモト　制御棒全挿入、完了。

間。

テツオ　反応、徐々に下がっています。

ギンザ　よし、最悪の事態は免れたぞ。

スミ　炉心温度の上昇、止まりません。

スズ　さっきより緩やかにはなってるけど、崩壊熱だ。

ドウモト　冷却系が動いてないってことか。

スズ　内圧が高過ぎる、水が気化してしまって、冷却水が入らないんだと思います。

ギンザ　水が入らない、って。

ドウモト　炉内の圧を下げる方法はないのか。冷やせばいいんだ。

ギンザ　冷やすために圧を下げないといけないんだよ。

スミ　炉心温度、上がり続けてます。

スズ　炉内圧力一三〇気圧を越えました。

テツオ　すでに耐圧性能を越えています。
スズ　このままだと爆発します。
ドウモト　緊急開放しよう。
ギンザ　ダメだ。
ドウモト　このままでは危険だ。
ギンザ　放射能があたりに飛び散っちまうぞ。
ドウモト　爆発したら世界中に飛び散るぞ。ぼくたちもお陀仏だ。
スズ　弁の開放しかないと思います。
スミ　汚染は避けなきゃ――
テツオ　他に、他になにかないですかね、高圧なままでも冷やす方法が。
スズ　このままじゃ高圧で爆発するし、水素爆発の可能性だって――
スミ　核爆発、はないか、臨界は止まってるもんね。
スズ　爆発したらウランがあたりに飛ぶし、二次火災が起きる可能性もある。開放しましょう。
ギンザ　この村にひとが住めなくなるぞ。
ドウモト　高濃度の汚染はされんよ。
ギンザ　そんなこと約束できるのか。
ドウモト　そりゃ無理だ。
ギンザ　無理だろう、世界中の誰もやったことがないことをやるんだ、何が起こるかなんて分からんだろう。
スミ　わたしも怖いです。もし致死量の放射線が出たら。
ドウモト　気化した放射性物質だ、近づかなけりゃ問題ない。
スミ　命に関わることなのに――
ドウモト　命に関わることだからだ、ウランをバラ撒きゃオレたちゃ人殺しだぞ。
ナマリ　内圧を下げ、冷却水を入れよう。弁を開放する。
ギンザ　ぼくは反対です。
ナマリ　他に炉内を冷却する術はあるのかね。
ギンザ　いま考えています。
ナマリ　六〇秒待とう。ドウモトくん、圧力調整弁、緊急開放準備。
ドウモト　はい。
ギンザ　危険が大きすぎる。
ナマリ　放っておくより安全だ――
ギンザ　ぼくは責任が取れません。

ナマリ　わたしがすべて責任を取る。
ギンザ　班長にだって放射能汚染の責任なんか取れないでしょう。
ナマリ　黙って爆発させることは出来ない。あと四五秒だ。
ドウモト　開放値はどうしましょう。
テツオ　全開放しましょう。
スズ　一割です。わたしが数値を確認するので、圧力が下がらなければ開放率を上げましょう。
テツオ　いっぺんに下げたほうが、
スズ　急激な変化で燃料の破損や化学反応が起きるのを避けたいし、放射能汚染は最小に抑えるべきでしょう。
スミ　他にないかな。もっといい方法が。
テツオ　分かりました。
スズ　テツオくんは外部放射線計を。
テツオ　はい。
ギンザ　くそ、どうすりゃいいんだ。
ナマリ　一割開放でいこう。時間だ。圧力調整弁、一割開放。
ドウモト　はい。圧力調整弁、一割開放しました。

間。

テツオ　屋外線量、上がってます。
スズ　内部圧力、下降しはじめました。
スミ　冷却水、循環量が戻りはじめました。
テツオ　エー地点〇．五ミリシーベルト毎時、ビー地点〇．三ミリシーベルト毎時、シー地点。
スミ　炉心温度、上昇停止します。
スズ　内部圧力、まもなく規定圧力に到達します。
テツオ　シー地点は。
スズ　内部圧力、正常値に復帰しました。
ナマリ　圧力調整弁、閉じろ。
ドウモト　はい。圧力調整弁、閉じました。
ギンザ　早く言え、シー地点は何ミリシーベルトだ。
スミ　冷却水循環量、規定値に復帰。炉心温度、下降開始しました。

ギンザ　テツオ、シー地点は何ミリシーベルトだ。
テツオ　シー地点、二八ミリシーベルト毎時。

間。

スミ　炉心温度、千度を切りました。九九九、九九八、九九七――
ドウモト　二八ミリシーベルト毎時。だって。毎日、じゃなくて。
テツオ　二八ミリシーベルト毎時です。
ドウモト　二八ミリシーベルト毎時。
ナマリ　ひとが近づかないことを祈るばかりだね。
ギンザ　行きましょう、立入禁止にしましょう。
ナマリ　どうやって。杭でも立てるかい。範囲が広すぎるし、人手が足りんよ。
ギンザ　放っておけと言うんですか。
ナマリ　考えろと言っているんだ。
テツオ　これ、放射能汚染ですよね。
ドウモト　当たり前だろう。
テツオ　これ、大事故ですよね。
ドウモト　当たり前だ。何を言ってるんだ。
テツオ　実感が湧かなくって。そういう、大変なことになったっていう。

二場

一場から一週間後。真新しい鉄筋コンクリート四階建てのビルディング。その四階の一室。ドアは二つ、廊下と準備室につながっている。窓の外には海が見える。
原子力発電を説明する寸劇の練習中。スミ、ナマリが結合している。ドウモト、スズも結合している。テツオは走り回っている。リンはテツオを追いかける。

スミ、ナマリ　わたしたちは、ウランです。
ドウモト、スズ　わたしたちも、ウランです。
テツオ　ぼくは中性子。ものすごいスピードで動くよ。
リン　わたしは水です。中性子くんを減速させます。（テツオに触れる）

テツオ　減速するー。

テツオがスミとナマリにぶつかる。スミとナマリはばらばらになる。

スミ、ナマリあーれー。

テツオ　ぼくがぶつかると、ウランくんは分裂して、あたらしい友だちになるんだ。

スミ、ナマリはじめまして、

スミ　わたし、イットリウム。

ナマリ　ぼく、ヨウ素。

全員　これが、核分裂。

テツオ　ウランくんが分裂するとき、たくさんの中性子が飛び出すんだ。（たくさん飛び出す様に動く）

リン　中性子くんを減速させます。（テツオに触れる）

テツオ　減速するー。（そのままドウモトとスズにぶつかる）

ドウモト、スズ　あーれー。

スズ　わたし、クリプトン。

ドウモト　ぼく、バリウム。

テツオ　さあ、またウランくんが分裂してぼくがたくさん飛び出すぞ、また他のウランくんに衝突するぞ。

ふたたび結合したウラン二人組に、中性子が次々とぶつかって分裂させる。

全員　これが、臨界。

テツオ　ウランくんが分裂するとき、もんのすごい量の熱が発生します。

テツオは走り回り、スミとナマリ、ドウモトとスズのウランとぶつかりつづける。リン、いちいち減速させるために追いかける。スミとナマリ、ドウモトとスズは、分裂する演技の際、もんのすごい量の熱を表現するが、二チームともまったく違う質の動きになっている。全体にミスと思われる動きや接触が増えてくる。

テツオ　この、もんのすごい量の熱でもって、タービンをまわして、電気を発生させるのです。

テツオのセリフで、全員がタービンの動きに変わっていくが、スミはひとり離れる。

ナマリ、ドウモト、スズ、テツオ、リン　これが、げんし――

スミ　はいはい、もういいです。

テツオ　――りょくはつでん。（動きながら続ける）

スミ　もういいって言ってるでしょ、テツオくん。

テツオ　ええっ。

テツオ、止まる。長い間。仁王立ちのスミと、なんとなく歩いたり座ったりする一同。

スミ　なめてるんですか。

テツオ　なめてません。

スミ　きみ黙ってて。

テツオ　ええっ。すんません。

間。

スミ　演劇、なめてるんですか。

間。

スミ　返事は。

一同テツオに喋らせようとするが、テツオ無理無理という反応。

スミ　テツオくんさ。

テツオ　はい。

スミ　中性子の速度は。

テツオ　秒速二万キロメートル弱――
スミ　そうだよね二万キロだよね。
テツオ　はい。
スミ　いまテツオくんがやったのは何キロ。
テツオ　（間）秒速五メートルくらいで――
スミ　そうだよね、うん、そうだよね。四百万分の一だよね。いまわたしが秒速二万キロで動けって言ってるって思ってる？
テツオ　はい。
スミ　違うのそうじゃないの、そんなこと出来ないでしょ。人間は秒速五メートル以上では動けないんだから。じゃあどうしたらいいの。
テツオ　工夫して表現する。
スミ　そうでしょ。どこが工夫なの。どこが表現なの。
テツオ　（やってみせる）。

間。

スミ　（テツオに）練習不足。前と同じじゃ駄目、つねに改善していかなきゃ。研究者なんだから。ドウモトさん、スズちゃん。
スズ　はい。
ドウモト　（ひとりごと）うわこっちきた。
スミ　もんのすごい量の熱、やってください。
スズ　いま、ここで。
スミ　いま、ここで。

ドウモト、スズ、しぶしぶもんのすごい量の熱をやる。

スミ　なんで、なんで、なんで。
スズ　ごめんなさい、パートナーが代わって――
スミ　だからって振付変えないでくれる。
スズ　はい。
スミ　スズちゃんそういうとこあるよね。
スズ　（間）どういうところですか。
スミ　いいと思ったら勝手にやっちゃうでしょ、周りを気にせずに。わたしに

は、ウランの熱っていうより、肉じゃがの粗熱に見えるなあ。あなた肉なの、じゃがなの。肉なの。何なの。

スズ　ウランです。

スミ　ウランでしょ。ウランでしょ。理解してもらえること。この村の小学生にきちんと理解してもらうことが重要なの。余計なことしないで言われたことちゃんとやってください。

スズ　はい。

スミ　（全員に）明日なんだからね本番は。これ次第で子どもたちが原子力発電を理解してくれるか、ひいては科学に興味を持ってくれるかどうかの瀬戸際なんだからね。責任感持ってよ、もっと。さあ——

ドウモト　ぼく、ちょっと組合の用があるので——

スミ　もう一回やるよ。

ドウモト　来客を待たせるわけにはいかないから。

ドウモト、退場。

スミ　ちょっと、待ちなさい。一時待機。

追いかけてスミ、退場。残った一同は緊張の糸が切れて、身体を休める。テツオは動き始める。

ナマリ　桑原桑原。

スズ　班長、お上手ですね。

ナマリ　こう見えてわたしも、学生時代はちょっとしたもんだったのよ。「世にある、世にあらぬ、それが疑問ぢゃ」

スズ　すごい。歌舞伎だ。

ナマリ　うん、シェークスピアね。

スズ　量子論みたい。

ナマリ　シュレーディンガーの猫みたいだよね。ハムレットは葛藤している最中、この世界に存在していると同時に、また存在していない状態なんだよ。

スズ　（リンに）先生、ありがとうございます。

ナマリ　すばらしい水でした。

リン　でも、怒らせちゃいました。

スズ　無視してください。勝手に変えてはいけないけど、現状維持でもダメなんですって。

ナマリ　量子力学的だね。

スズ　そもそも演劇なんて観たいですか、映画のほうがいいんじゃないですか。

リン　みんな皆さんのお越しを楽しみにしてますよ。

スズ　（テツオに）うるさい。（テツオ止まる）

ナマリ　そういうことなら、がんばりますか。

スズ　映画も準備しておきましょう。

ナマリ　そうね、何が起きるかわからないしね。

テツオ　どうですか。

スズ　え？

テツオ　（動き、止まる）中性子に、秒速二万キロに見えますか。

間。

テツオ　秒速二万キロに見えますか。

間。

スズ　班長。（間）先生。

ナマリ　いい。いいよ。ね、スズくん、先生。

スズ　そうですね。

テツオ　いいってことは、見えるってことですかね。

リン　人間は、中性子には、なれません。

テツオ　（止まって）そうか。人間は、中性子には、なれません。か。

ナマリ　テツオくん、映画探すの手伝って。

テツオ　はい。

ナマリ　コツはね。信じること。自分は中性子なんだって、信じきること。

テツオ　はい。

ナマリ、テツオ、準備室へ退場。リンは変わらず突っ伏して、スズは報告書の記入を始める。

スズ　「楽しみにしてる」って、お世辞ですよね、先生。
リン　先生ってやめてください。
スズ　だって先生じゃないですか。
リン　博士のスズさんに言われるのは、ちょっと。
スズ　じゃあ、リンさん。
リン　はい。スズさん。
スズ　助かりました、代役を引き受けてくださって。
リン　子どもたち、本当に楽しみにしてますから。
スズ　先生方はどうなんですか。
リン　色々なお考えの方がいらっしゃいますから。
スズ　怖いなあ。
リン　ギンザさん、どうされたんですか。急にお辞めになったとか。
スズ　さあ。なにしろ急なことだったので、家の都合ですかねえ。
リン　そうですか。

間。

スズ　そうだ、例の件。大丈夫ですよ。
リン　本当ですか。
スズ　はい、どうせ余るんですから、学校で使ってもらったほうが。
リン　本当にありがとうございます。子どもたちも喜びます。
スズ　気になりますか？　ギンザさんのこと。

間。

リン　学校の線量計が、先週からすごい数字になってるんですけど、なにかご存知ないですか。
スズ　ああ、そのことですか。米軍の水爆実験のせいだって噂ですよ、ほら、第五福竜丸の件みたいな。ここの線量計もすごいカウントになります。

キンシロウ、入場。スズ、リン、黙ってしまう。

キンシロウ　突然すみません、何回かノックしたんですが。

スズ　（間）そうなんですか、全然聞こえなかった。
キンシロウ　はい。けっこうなお祭り騒ぎでしたね。
スズ　失礼しました。
キンシロウ　いつもあんなに、その、闊達に議論しているんですか。
スズ　まさか。
キンシロウ　そうでしたか。安心しました。てっきりツイストしながら研究しているのかと思いましたよ。
リン　失礼ですが、どちらさまでしょうか。
キンシロウ　ヤマダキンシロウと申します。保守党所属の衆議院議員です。
スズ　ラジオで聞いたことある。キンさんキンさん、ですよね。
リン　え？
スズ　キンさんキンさんって頼られてるって。お若いのに実行力があって。
キンシロウ　お二人はここの研究員でいらっしゃいますか？
スズ　私は。ナカコシスズです。お話出来て嬉しいです。（リンに）テレビ局のチャンネル割り当て、大揉めしてたのを見事にさばいたんですよ。
リン　それすごいんですか。
スズ　すごいですよ。みんないい周波数がほしいんだから、揉めるに決まってるじゃないですか。
キンシロウ　お恥ずかしい。こちらこそ、こんなにお美しい研究員がいらっしゃるとは思っていませんでした。女性もいらっしゃるんですか。
スズ　科学の世界は実力主義ですから。
キンシロウ　なるほど。政治の世界も見習わなければいけませんな。
リン　なんの御用ですか。御用がなければお帰りください。
スズ　リンさん。
キンシロウ　これは手厳しい。もちろん用はありますよ。日本のエネルギー政策の要は原子力発電、その勘所である研究所の視察に参りました。さて、来たはいいが、通り一遍の観光ツアーは退屈でね、取り繕った外面には興味がないんです。ぼくは現場の人間の本当の声を聞きたいんだ。もしなにか問題や、困っていることがあるなら、なんでもやらせてもらいたい。それがこの研究所を支えて、この研究所が国の将来を背負って立つんだから。
スズ　すごい。
リン　お生憎様ですが、一階の受付に戻って、広報を呼んでください。機材を壊されるくらいであればお金で片がつくかもしれませんが、大量の放射線を

あびるような羽目になったら、笑い話じゃ済みません。

スズ　リンさん。

キンシロウ　これは失礼。ここまで警備員もなにもいないで入ってこられる、風通しの良い研究所なので、てっきり安全なんだと思っていましたよ。

リン　危機管理体制の強化については上申しておきます。ご指摘ありがとうございました。

リン、準備室に退場。

スズ　ごめんなさい。ご気分害されましたよね。

キンシロウ　好感を持ちましたよ。さっぱりした方ですな。

スズ　キンさんて優しいんですね。奥さんが羨ましいなあ。

キンシロウ　さてどうでしょうかね。毎晩飲んだくれて帰ってくる亭主は決していい亭主ではないでしょうな。うちのワイフは「次に泥酔して帰ってきたら二度と敷居を跨げぬと思え」とお冠ですよ。

スズ　敷居が跨げないなら、お勝手から入ればいいんですよ。

キンシロウ　頓智が効いてますな。

スズ　なんでも相談してくださいね、キンシロウさん。

キンシロウ　これは頼もしい。

スミ、入場。脇目もふらず頭を下げ、九〇度の角度の体勢のまま話しだす。

スミ　理不尽ですみませんでした。でも、子どもたちに正しい科学の知識を知ってもらいたくて、そのためには楽しい演劇を見せたいなって思って。つい我を忘れてしまって、ごめんなさい。いい原子力発電演劇、どうぞよろしくお願いします。

スミ、顔をあげると、目の前にいるのはキンシロウ、その後ろにスズ。

スミ　誰？

キンシロウ　ヤマダと申します。あなたは？

スミ　大失敗だよ。

スミ、退場。

キンシロウ　彼女は大失敗さんという名前なの？

スズ　気にしないでください。彼女、ノイローゼ気味なんです。（紙片を渡す）

キンシロウ　ありがとう。お勝手にバリケードが築かれていたら連絡するよ。

ドウモト、入場。

ドウモト　ええっと。ヤマダ先生、ですか？

キンシロウ　どちらさまですか。

ドウモト　本日案内役を仰せつかっている、ドウモトです。

キンシロウ　あなたが。キンさんと呼んでください、ドウモトさん。

ドウモト　すみません、入れ違いになってしまって。

キンシロウ　こちらにいらっしゃると伺ったものですから、勝手に入ってしまいました。

ドウモト　（スズに）みんなは。

スズ　班長とテツオくんは映画探してて、リンさんも手伝ってるんじゃないかな。

ドウモト　映画？

スズ　演劇やりたくないって。

ドウモト　そりゃそうだ。他は？

スズ　他って、誰？

ドウモト　誰って、他だよ。

キンシロウ　もうひとり、大失敗さんが。

ドウモト　大失敗さん？

キンシロウ　突然いい姿勢で謝ってきた女性が、いい姿勢で出て行きましたよ。

ドウモト　ああ、なるほど。保守党の議員がから組合に連絡が来るなんて、驚いていますよ。

キンシロウ　保守党といっても、コチコチの愛国者から筋金入りのリベラルまでいますからね。さっきの大失敗さんのノイローゼは、ひどいのですか。

ドウモト　え？

スズ　ノイローゼ気味って言ったんです。

ドウモト　ああ、彼女の悪い冗談ですよ。ただ激務がたたって、疲れているだけでしょう。

キンシロウ　なんだ、これは一杯食わされたなあ。さて、ではドウモトさん、案内をお願いしますよ。

ドウモト　はい。ここは御存知の通り、商用の原子力発電施設をつくるための研究施設です。原子力発電はとても複雑な仕組みでできていますので、研究部門も多岐にわたります。ぼくたちの班は、動力試験炉というものを担当しています。これは日本で初めてつくられた原子力発電炉で、この研究所でも最も重要な部署の一つです。

キンシロウ　ええ、動力試験炉には大いに期待していますよ。

ドウモト　動力試験炉は、四班三交代制で二十四時間、優秀な研究者によって管理されています。一勤務は八時間半、朝二日、夜二日、深夜二日。ぼくたちの班はいま二日目の当直を終えたところです。原子炉っていうのは、一旦動かし始めたらそうおいそれとは止められない。つきっきりで見てあげないと、何が起こるかわからない。ましてや相手は日本ではじめての動力試験炉です。研究者たちにも大変な重圧がかかる。ちょっとした異常も見逃せない。トラブルで緊急停止、なんてこともありえる。そういう、一歩間違えれば大事故につながるような場所で六日間当直して、夜勤が明けて一日休んで、また朝から当直です。同時に研究もしなくちゃいけない。実用化にあたって、故障の報告と修理過程の記録、改善点の提案、などなど。ヤマダ先生、この労働環境をどう思いますか。

キンシロウ　それは、ノイローゼになるのもむべなるかな。もっと余裕のある勤務体系を作らんとね。

ドウモト　そうです。大事故が起こってからでは遅いのに。ここの理事たちには理解できんのです。

キンシロウ　ドウモトさんは、共産主義者ですか。

ドウモト　（間）ぼくは法で定められている、労働者の正当な権利を守りたい、人権派です。

キンシロウ　では、ぼくと一緒だな。この件に関しては任せてくれたまえ。

ドウモト　いえ、ご厚意だけで結構です。

キンシロウ　遠慮するな、きみとぼくの仲だろう。

ドウモト　（間）研究所の自主独立を尊重してください。どんな形であれ、外部からの圧力でねじ曲げられるのは反対です。長い目で見て悪影響です。

キンシロウ　だが理事たちは聞く耳を持たんのではないのかね。

ドウモト　なに、聞かせてやりますよ。ここに入って六年間、最初は住む場所さえなくって、みんなで農家の離れに下宿して、男五人が八畳間で寝起きしていました。研究所だと思って来たのに、来る日も来る日も土木工事と建築現場と、白衣なんか丸一年着ないですごしましたよ。自分が何屋か忘れたころに、試験管とビーカーを渡されました。そういうところから、寮や、食堂や、給料や、正当な扱いを獲得しているんです。

ドウモトが喋っている間に、ナマリ入場。

キンシロウ　失敬、おまかせしよう。きみに任せれば研究者たちの待遇は万事安心というわけだね。

ドウモト　ぼくはあなたを案内しているだけで、陳情しているわけじゃない。

ナマリ　（スズに）誰？

スズ　国会議員のヤマダキンシロウ先生です。

ナマリ　先生、よくぞお越しくださいました。わたしは動力試験炉実験部のナマリと申します。

キンシロウ　ヤマダキンシロウです。

ナマリ　この班の班長をしておりまして、申し訳ありませんね、うちのが無礼をしました。当直明けで頭がぼんやりしているもんですから、お許しください。どうですか、動力試験炉をご覧になりませんか、ご案内しますよ。長年抱えている日本のエネルギー問題もこれで万事解決というわけで、これはまさにおめでたいと、いってみれば縁起物。本邦初の原子力発電も間近ということで、江戸っ子であれば初ガツオってなもんでね。ご興味おありでしょう。

キンシロウ　人間は圧力をかけられると足が遠のくものでね。

ナマリ　分かります分かります、これが原子なら圧力かければ融合するんですがねえ。

間。

ドウモト　現場を視察しに来たんじゃないんですか？

キンシロウ　御存知の通り、この研究所の半分は国民の皆様の血税でできています。先

の大戦からようやっと二〇年がたとうとしているが、いまだ戦争の傷跡が癒えたわけではない。いまこんな金食い虫に予算を注いでいるのは、なぜですかね。

ナマリ　それはもちろん、将来のエネルギー源として、

キンシロウ　そうです。戦争の原因の一つは、慢性的な資源不足です。平和で豊かな国の開発のためには、石炭、石油に代わるエネルギー源が断固必要です。

ドウモト　原爆でしょ。

間。

ナマリ　これっ。

ドウモト　色々言ってますけど、再軍備したときに原爆がほしいんでしょ、保守党は。

ナマリ　やめんか。

キンシロウ　いえ、どうぞ続けてください。

ドウモト　アメリカとソ連が睨み合ってる間に、世界中が原爆を持つようになる。「原子力の平和利用」なんて言ったところで、原子炉があればプルトニウムが作れるようになる。プルトニウムさえあれば、いまどき大学生だって原爆くらい作れますよ。違いますか。

キンシロウ　すっかり嫌われたようだね。残念だが、違うよ。きみは考え違いをしている。原爆なんてほしくないよ。

ドウモト　戦争放棄、なんておためごかしは言わないですよね。

キンシロウ　ははは、言わんよ言わんよ。そりゃ憲法九条は尊重するがね、いくらこっちが戦争を放棄したところで、いきなり攻めこまれちゃたまらんからなあ。原爆はいらん、というのはこうだ。ドウモトさんも言ったように、きみたちは原爆が作れるわけだ。

ドウモト　それは、どういう意味ですか。

キンシロウ　そのままの意味さ。

リン、テツオ、入場。

リン　まだいたんですか。

キンシロウ　残念でした。ところで、あなたは原爆が作れますか？

リン　作れません。親類を長崎で亡くしてますので。
キンシロウ　それは無念でしょう。お悔やみ申し上げます。ですが今伺っているのは技術的な、純粋に技術的な意味です。
リン　政治家は嫌いです。
キンシロウ　肩書でひとを判断するなんて、科学者とは思えない発言ですね。
リン　わたし、科学者じゃありませんから。ササバルリン、この村の小学校で教師をしています。
キンシロウ　こりゃ一杯食わされたな。
リン　わたし何も言ってません。あなたが勝手に勘違いなさったんです。
ナマリ　いい根性してるわ。
リン　あなたみたいなデリカシーのない人間が政治家なんてやらないでください。ここが長崎だったら表を歩けなくなりますよ。
キンシロウ　まあ聞いてください。先生の仰ることももっともです。もっともですが、デリカシーだけを大事にしていてはマツリゴトはできません。ときには聞きたくないことも聞かなきゃいけない、見せたくないものも見せなきゃいけない、言いたくないことも言わなきゃいけない。
リン　詭弁です。そうやって十万の長崎人を殺した。いまも何万のひとが苦しんでいるかご存じですか。
キンシロウ　あれはアメリカさんがやったんだ。同じ日本人を恨むのは筋が違いませんか。
リン　戦争をはじめたのは政治家でしょう。
キンシロウ　政治家を選んだのは国民です。いいですか、これは大事なことなんです。あなたも平和を求めている、そして、わたしも平和を求めているんです。ただ考え方が違うだけです。ご理解ください。
リン　そうやって丸め込んで、ウソばっかりついて。
キンシロウ　ウソならあなたもついたでしょう、研究員のふりをして。ウソはついてないなんて言いっこなしですよ。騙す気で黙るならそりゃウソをついたのと同じことだ。
ドウモト　（リンに）先生、ここは。
キンシロウ　ドウモトさんは大学生でも原爆を作れると言っていたね。もちろん君も、作れます。作ろうと思えば。
ドウモト　そうだろう。それでいいのさ。だから、原爆なんていらんのだよ。（間）つまりこうだ。ぼくら日本は原爆を作らん。だが、作ろうと思えば作ること

はできる。技術はある。ウランもプルトニウムもある。「原爆が作れない」のではなく「原爆を作らない」んだ。万が一原爆を作ったところで、それが外国に知られたらどうなる。日米安保も何もかもご破算、日本は一から軍備をせにゃならん、いくら所得倍増なんて威勢よく言ったところで、来年にはオリンピックもある、新幹線と高速道路と競技場と、金なんていくらあっても足りん。再軍備なんて財政的に不可能だ。外交面から考えても、敗戦国が軍隊と核兵器で武装できると思うかい？　ソ連と地続きのドイツでさえ、ようやっと軍隊らしきものができるかできないかだぜ。日本が十分な軍隊を持つなんて、夢のまた夢だよ。だから、原爆なんて作らなくていいの。作れれば。相手に「こいつらは原爆を持っているんじゃないか」と想像させられれば。麻雀と一緒だよ、敵さんに「こちらは役がないですよ」なんてわざわざ教えないだろう。ひょっとしたら役満をテンパっているんじゃないか。そう思わせることさえできれば、相手だってそう強気にはでられないもんだよ。相手が想像することは止められんからなあ。

スズ　すごい。

キンシロウ　きみたちのような方々は、政治家が戦争をしたがる拝金主義者だと思ってるんだろうが、案外ちゃんと考えているんだよ。結論ありきで人を見るのをやめたまえ。科学者らしく事実を積み上げてから、結論を出してくれ。

ドウモト　きみたちのような方々って、どういう意味ですか。

キンシロウ　夢多き理想家という意味だよ。

リン　もうここで原爆の実験をやってるんじゃないですか。

間。

キンシロウ　まさか。やってるのかい。

ナマリ　ご冗談でしょう。

リン　じゃあ、なんで線量計が五万カウントになってるんですか。

スミ、入場。一同びっくりする。スミ、それには気づかずにキンシロウに頭を下げ、九〇度の角度の体勢のまま話しだす。

スミ　ヤマダさん、誰とか、大失敗とか、言ってすみません。クドウスミと申します。（顔を上げる）

キンシロウ　国会議員のヤマダキンシロウと申します。
スミ　はあ。議員の方がなんで。
ドウモト　研究所の視察だってさ。
スミ　はあ。お連れの方はどこかではぐれられたんですか？　お一人でこんな田舎までいらっしゃいませんよね。
ドウモト　たしかに。
キンシロウ　ぼくの尊敬する政治家は水戸光圀公でね。江戸の頃に諸国漫遊しながら世直しをしたんだね。知りませんか。（間）
ナマリ　ご立派ですね。
リン　スミさんの言うとおり。おかしいんじゃないですか。秘書も何も連れずに視察なんかしますか。あなた本当にヤマダキンシロウ議員なんですか。
キンシロウ　もちろん。
リン　誰か議員の顔を知ってる？
キンシロウ　この議員バッヂはどうですか。議員手帳もお見せしましょうか。
リン　そんなものは偽造できるでしょう。
キンシロウ　（スズに）そうだよね。
スズ　見たことはないですから、ラジオでお声は聞きましたけど。
キンシロウ　自分が自分であることを証明するっていうのは難しいですね。
スズ　浪花節。浪花節やったらいいんですよ。ラジオで聞いたやつを。
キンシロウ　ええ、こんなところでやっちまうのかい。仕方ねえなあ。
リン　ふざけないでください。警察を呼びますよ。
キンシロウ　あなたと同じ目的ですよ。
リン　（間）わたしは、演劇の練習に立ち寄っただけです。
キンシロウ　ならばぼくも演劇の練習です。
リン　ふざけないでください。
キンシロウ　正直に申し上げましょう。ヤマダキンシロウが非公式でここを訪れたのは、原子力発電の型を英国式からアメリカ式にするためです。

間。

ナマリ　黒鉛減速炉から軽水炉に、ということですか。
リン　どういうことですか。
スミ　この村に新しく建てている原子力発電所、あれは黒鉛減速炉といって、英

国式の発電所なんです。うちの動力試験炉はアメリカ式で、軽水炉っていうやつです。日本の原子力発電所は英国式のものを導入するって聞いていますけど、変わるんですかね。

キンシロウ　官僚たちはアメリカ式軽水炉にしろと言うのだが、ぼくは天邪鬼でね、鵜呑みに出来ないのさ。実際にいまアメリカ式を使っている諸君の声を尊重したい。一体日本の原子炉は英国式が望ましいのか、アメリカ式がより優れているのか。（間）

ドウモト　それでアメリカからいくらもらえるんですか。

スミ　やめときなよ。

キンシロウ　政治家はカネしか頭にないという先入観を、捨ててはもらえんかね。

ドウモト　最初から結論ありきの議論は興ざめですよ。

ナマリ　そうは言ってないだろう、先生は我々の意見を参考にして決められるってことだ。

ドウモト　ぼくらの話の都合のいい部分だけ抜き取って、報告書はていよく整えてってね。お決まりのやつですよ。

ナマリ　それならわざわざ、ここに来る必要がないだろう。真に国益にかなった発電方法を選ぼうとしている、国士だとわたしは思うな。

キンシロウ　ドウモトさん、あなたこそ、結論ありきでものを見ているんじゃないかな。どうかね、ぼくという人間を、自分の目で観察して、実験して、結論を出してはみないかね。それとも自分の考えを改める機会を放棄するかね。

ドウモト　（間）班員全体に手当は弾んでもらいますよ。

キンシロウ　もちろんだ。

ナマリ　では、はじめようか。黒鉛減速炉と軽水炉のどちらが日本にふさわしいか。

スズ　話すまでもないでしょう、軽水炉ですよ。

スミ　いやいや黒鉛炉でしょう。

スズ　ウソ。どこが。

スミ　ハニカム構造の黒鉛ブロックがたまらない。

ドウモト　それはお前の趣味だろう。

スミ　あの黒光りする質感、持ち上げたときの重量感、どこかしっとりとした触感。減速材が水なんて、味気ない。

ドウモト　合理的でいいじゃないか。なんで黒鉛炉を入れたんだろうな。

スズ　アメリカが技術を出し惜しんでいたからってのもあるし、利権もあるんだろうけどね。競合させたほうが安くなるだろうし。

ドウモト　でも、それは黒鉛炉を検討する理由にはなっても、導入する理由にはならないよね。

ナマリ　政治は一旦わきにおいて、技術的な部分で考えていこうか。

ドウモト　本質的にはどっちもどっちじゃないですか。核分裂を扱う以上は出るエネルギーだって同じです。

スズ　応用の部分では全然違ってくるね。実際に一万メガワットの熱出力を持たせようと思ったら、軽水炉はともかく、黒鉛炉はバカでかくなるよー。

キンシロウ　バカでかく、ていうのはどれくらいを指していますか。

スズ　山手線の内側くらいですかね。

キンシロウ　それはバカでかい。

スミ　逆に言えば、規模さえ大きくすれば黒鉛炉でも十分だってことですよね。

ドウモト　狭い日本そんなに広い場所はないよ。

スミ　青森なら土地はいくらでもありますよ。地盤も硬いですし。

スズ　黒鉛炉推しますねえ。

スミ　スズちゃんには、炭酸ガスと黒鉛ブロックの組み合わせの妙が分からないの？

スズ　分かりません。

テツオ　分かります。

スズ　分っかんないよ。

ナマリ　安全性は。

スズ　軽水炉がどうこうより、黒鉛炉は燃えやすいし、地震に弱いですからね。なにしろ重すぎます。

スミ　軽水炉だって、汚染された水が大量に生まれるじゃないですか。

ドウモト　いや、地震や事故を考えると、黒鉛の燃えやすさは汚染水より断然怖いよ。

スズ　軽水炉は水が大量に使えるっていうのが強いよね。

スミ　黒鉛炉だって炭酸ガスなんか全然使えるじゃない。

スズ　いざというとき海を使えるもん。こと冷却性能でいえば軽水炉の圧勝でしょう。

ドウモト　黒鉛炉は、もともとプルトニウムを生成するための技術を、無理やり発電に応用しているから、筋が悪いよ。英国ならいいのかもしれませんが、日

本には合わないぜ。

ナマリ　将来性はどうだね。

スズ　ウランによる核分裂自体、過渡期の技術ですよ。

スミ　いまは黒鉛炉と軽水炉の話でしょ。黒鉛炉と言いたいところだけど、微妙だなあ。小型化は難しいよね。

ドウモト　小型化が難しいってのは、この国においては大きな欠点だな。

スズ　やっぱり規模が大きくなりすぎよね、黒鉛炉は。それはどうしようもないし、炉心が小さくならないと、出力を大きくしようとしても限界があります。

スミ　むう。

ドウモト　しばらくは軽水炉を改良しつつ、新しい技術に乗り変わっていくんだろうな。しかし、黒鉛炉も軽水炉も、発電所としてはまだどこの国でも実用ってほど動いてないんで、思いがけないトラブルなんてのはどんどん出てくるでしょう。絶対に安全とは言い切れないです。

ナマリ　それを見越した上で、軽水炉に可能性がある、てことでいいかな。

ドウモト、スズ　はい。

スミ　しぶしぶ、はい。

リン　楽しそうですね。原子力の話って、そんなに楽しいですか。

スズ　はい。

リン　わたしの家族を殺したテクノロジー、楽しめるんですね。

スズ　リンさんの家族を殺したのはテクノロジーじゃありません。アメリカ人です。

ナマリ　まあまあ、先生のお気持ちもお察しします。しかし、技術はあくまで技術でしかありません、それを使う人間に問題があります。ガスの火だって、料理に使えば多くの人間を飢えから救うし、兵器にすれば多くの命を奪うんですから。使う人間の問題です。ね。（間）テツオくんもいいかね。

テツオ　（間）はい。

ナマリ　わたしらの意見としては、軽水炉の将来性が高いと考えます。

三場

場面は突然、序幕に戻る。サンコとじじいがいる。

サンコ　おじいちゃん、あんま喋らないね。

じじい　喋らなかったんじゃない、喋れなかったんじゃ。

サンコ　どういうこと。

じじい　わしらはウソをついておった。たしかに、黒鉛減速炉よりは軽水炉のほうが将来性のある技術じゃろう。しかし軽水炉にしたところで生まれたての技術であって、問題点は山ほどあった。そのうえ。大きな事故がすでに起きていたんじゃ。事故はわしらのせいではない。そして、適切な対応で一人の死者も出さずに済んだ。もしもあのとき、対応に失敗していたら、村中の住人が死んでおったかもしれん。放射能汚染もどこまで広がっていたか分からん。わしらは世界を救ったんじゃ。しかし、だからといって事実を隠していいことにはならん。大きな事故があったのに、それを伝えずに軽水炉を勧めるのは欺瞞以外のなにものでもない。

サンコ　でも、わざとウソついたわけじゃないでしょ。

じじい　わざとウソをついたわけではない。しかし余計にたちが悪い。本当のことを言わんということは、己は不誠実なことはしていないと思い込んで、責任逃れをしたいだけじゃ。事故があったなら事故があったことを伝え、その上で選んでもらうのが物事の道理じゃ。結局、わしは軽水炉の開発に人生を捧げることになった。だが、これで良かったのか、黒鉛炉でも軽水炉でもない選択肢があったんじゃないか。だがこの日から、それを考えることを避けるようになってしまったんじゃ。それもこれも、あのとき本当のことを言わなかったからなんじゃないか、と考えとる。ことにあの、地震があってからは。

サンコ　マジで？

じじい　マジで。

サンコ　じゃ、やりなおせるよ。

じじい　ええっ。

サンコ　マジなら、やりなおそう、おじいちゃん。

四場

場面は突然、二場の続きに戻る。スズ、キンシロウ、テツオ、リン、ドウモト、スミ、ナマリがいる。

ナマリ　まあまあ、先生のお気持ちもお察しします。しかし、技術はあくまで技術でしかありません、それを使う人間に問題があります。ガスの火だって、料理に使えば多くの人間を飢えから救うし、兵器にすれば多くの命を奪うんですから。使う人間の問題です。ね。（間）テツオくんもいいかね。

テツオ　（間）いいえ。

間。

ナマリ　うん？

テツオ　軽水炉はダメだとおもいます。黒鉛炉もダメですけど。

ナマリ　何を言い出すの。

テツオ　二〇年後には核融合炉が実用されるので、それまでのツナギにしかならないと思う。

スズ　それは誰が決めたの。

テツオ　ぼくです。

スミ　テツオくんの夢、てことだよね。いまの議論と関係なく。

テツオ　でも、核融合炉がこの研究所の本命だと、

ドウモト　たしかに、軽水炉は過渡的な技術かもしれない。けど、融合炉が二〇年ねえ。

テツオ　フェルミが予想したよりもずっと早く原爆が出来た。たったの六年ですよ。原子核物理学は猛スピードで進歩してるんじゃないですか。

キンシロウ　核融合ってのは、鉄腕アトムのあれかい。

テツオ　はい。

キンシロウ　漫画の世界の話かい？

テツオ　いえ、現実に研究も進んでいます。核融合は重水素と三重水素を融合させて、その時に出るエネルギーを使います。大きな特徴としては、生成物が放射性同位体ではありません。

キンシロウ　それは、核分裂は放射能が残るけど、核融合は残らないということかね。

テツオ　残らないことはないけど、全然少ないです、もう圧倒的に。核分裂で残る放射性同位体がどんぶりいっぱいのメシだとしたら、核融合は米粒一粒くらいです。

キンシロウ　それが、二〇年後に出来るのかね。

スズ　できますね。人間が月に行こうとしているんだから、核融合だって出来ち

ゃうと思いますよ。

テツオ　ぼくがやります。

キンシロウ　頼もしいね。

テツオ　だから、いまの軽水炉と黒鉛炉の計画は見直してください。軽水炉は危険です。

間。

ナマリ　うんうん、分かるよ、分かる。

テツオ　「公開・民主・自主」が原子力三原則ですよね。

ドウモト　あとで話そう、な。

テツオ　だったらやっぱり、公開したほうがいいと思います。

ナマリ　テツオくん、分かったから。

テツオ　小学校の線量計にも記録が残ってるんですよ。

スミ　テツオくん、落ち着こうか。

テツオ　先生がた。聞いてください。

ナマリ　テツオくん、ちょっとビーチに出ようか。

キンシロウ　あとでみんなで行きましょう。ぼくは彼の話が聞きたいな。

ナマリ　先生にお聞かせするような話じゃありません。

テツオ　第三者として、理性的な判断をしてください。つまり、ぼくたちはこのまま原子力の研究をしていいのかということです。

キンシロウ　分かった。

リン　ええ。

五場

一場の続き、あれから一時間後。動力試験炉の制御室。

ナマリ　現状報告。

スズ　はい。炉内圧力、異常ありません。構内電源、動力ともに異常ありません。

スミ　冷却装置は正常に動作しています。炉内温度、順調に下がっています。記

録紙も問題なく出力されています。

テツオ　炉内の反応は停止しています。制御室内ですが、放射線量は検出値以下です。いつもどおりですね。

ナマリ　屋外線量は。

スミ　シー地点の線量が高い理由は、排気口に近いことと、風向きが海に向かっていることが要因だと予想されます。幸い、この時期の風は西よりの風、つまり海に向かって吹く傾向がありますし、気象庁に確認したところ、予報もそのようになっています。以上の情報から、放射性物質は海に向かって流れ、居住地域への流入はほぼないと考えていいでしょう。

間。

ナマリ　おつかれさん、まずは一段落だ。

一同、ふっと力が抜ける。スミ、機材を調べはじめる。

ドウモト　なんで警報が鳴らねえんだ、なんのための警報だ。

ギンザ　超臨界して、放射線を漏らしたってことか。ぼくたちが。

スズ　誰のせいだろうね。

スミ　あんたのせいよ。

スズ　あんたが機材を壊したんでしょう。

スミ　あれくらいで壊れるわけない。

ギンザ　臨界とは関係ないだろうけど。

スミ　さっきわたしが投げつけたところで断線してます。非常用警報につながるセンサー部分ですね。（身体を九〇度にまげて）ごめんなさい。

スズ　ほら。

ドウモト　よし、非常用警報は二回路まわしておくように報告だな。

スズ　弱すぎよね。ほんといい加減。

ナマリ　超臨界の原因は。原子炉の故障なのか、操作を誤ったのか。

ギンザ　それですよ。それが分からん。

ドウモト　制御棒の操作については、計画書通りです。検証しましたが抜かりはありません。

ギンザ　手順違いでなければ、計算の間違いか、機械の問題になるね。

スズ　理論上は超臨界なんて起こるはずありません。
ナマリ　分かった。機械の故障を疑ってみよう。
ドウモト　どうせ設計上の問題ですよ。くそ、これで何度目だ。
スミ　アメリカの機械は大雑把すぎる。
ギンザ　班長、報告書は私が作成します、良いでしょうか。
ドウモト　外部にこれだけ放射線が出てしまうと、今後の作業も考えないといけなくなりますね。
ギンザ　班長。
ナマリ　うーん。大変なことになったねえ。

間。

ナマリ　なかったことにしよう。
ギンザ　え？
ナマリ　みんな、忘れて。
ギンザ　ご冗談でしょう。こんなときまで。
ナマリ　弁の開放のことだけね。あとはアメリカへの苦情も、修理の依頼もあるから、ちゃんと報告するさ、ギンザくん。
ギンザ　（間）「公開・民主・自主」が原子力三原則ですよね。いや、そんなことを取りざたするまでもなく、科学者としての良心として、いやそれ以前に、人間として問題があるでしょう。
ナマリ　そうね。でも、わたしはクビになってもいいけど、ここの優秀な人材たちがこの程度のことで去っていくのは、惜しいなあ。
ギンザ　そんなの、去ることになるかどうかは分からないじゃないですか。
スミ　全部公表しましょう。
スズ　そうね、わたしもそれがいいと思います。
ナマリ　おお、そうか。ドウモトくんも同じ意見かね。
ドウモト　はい。
ナマリ　そうか。
ギンザ　テツオは。
テツオ　ぼくは、公表したほうがいいと思います。

間。

ナマリ　分かったよ、全部報告しよう。だが、きちんと考えてみようじゃないか。それこそ科学的に、報告した場合と、報告しなかった場合を、仮説に基づいて検証してみようじゃないか。

ギンザ　無意味です。そのあと実証実験が出来ない。

ナマリ　まあまあ、そう言わずに。ドウモトくん、もし報告した場合、どうなる。

ドウモト　はい。まず研究所内で調査委員会が発足するでしょう。平行して行政や新聞社への報告が行われます。なにしろはじめての事故による放射能汚染です。原子力は安全だと言いはってきた研究所は、極めて微妙な立場におかれることになるでしょう。原子力研究への反対運動が盛り上がる可能性もあります。

ギンザ　おいおい、見通しが暗すぎる。

ドウモト　三〇ミリシーベルト近い線量が出てるんだぜ、全部で何万ベクレルの放射性物質が出たんだか、計算してみろよ。

スズ　圧力弁の開放時間を八秒、放出した水蒸気が一〇〇立米枚秒、水蒸気に含まれる放射性物質が一立米あたり一万ベクレルと仮定して、八〇〇万ベクレルです。

ドウモト　八〇〇万ベクレルだ、これだけ放射性同位体をばらまいたんだぜ。これ以上はなにもしてくれるな、と思うのが人情だろう。

スミ　第五福竜丸やキューバ危機のときも大騒ぎになりました。

ドウモト　原子力の研究はもうオシマイかもしれない。

ギンザ　たしかに高濃度の汚染だが、健康被害が出るほどじゃないだろう。スミの報告でもあったろう、風は海に向かって吹いている。

ドウモト　分からんよ、長期的な健康被害や遺伝的な問題ははっきりしていないんだ。

ギンザ　少なくとも、広島長崎の例で言えば、一〇〇ミリシーベルト以下で何らかの健康被害が出たという記録はない。研究所内で最も線量が高いと予想される、弁の直近で三〇ミリシーベルト弱だ、より遠い計器では小数点以下に下がってる。村内で高濃度の汚染が広がっているとは考えにくい。

スミ　ギンザさんの仰るとおりです。でも、それを理解してもらうのは難しいんじゃないですか。

ギンザ　話せば分かるさ。

スミ　話しても分かってもらえないじゃないですか。説明会のときだって、原子

力反対のひとは、仮定の話や確率の話をしただけでヒステリーを起こすんですから。それが安全な数字か危険な数字かなんて、理解する気ないですよ。

ギンザ　それでも、努力するしかないだろう。いつかは分かってくれる。

スミ　わたし実家で、結婚できないって言われてます。子どもが奇形になるからって。いくら放射線が管理されているって言っても、広島や長崎の調査で、原爆症は遺伝しないって言っても、通じません。

スズ　理解する気の問題じゃなくて、理解する能力の問題だもんね。

ギンザ　そんなデマがまかり通るのか。

スズ　事故を起こしたという事実、放射能汚染が起きたという事実、それが全てです。その結果が安全か危険かなんて、ましてや「疫学的に有意な害がある事例は報告されていないので、問題が起こる可能性は極めて低い」なんていったって通じないですよ。「絶対安全じゃなければ原子力の研究はやらせん」なんだから。

ギンザ　それと戦っていかなければいけないんだろう。そこで思考停止してしまうひとたちに理解してもらうために、時間をかけるのがここの研究員の気概ってもんだろう。腹割って話そうぜ。（間）いや、たしかに、明日には理解されないかもしれない。湯のみの一つも投げつけられるだろう。だが、何十年かしたときに、きっと分かってくれるようになる。そのように日本国民と対話をしていくのだって、ぼくらの仕事だろう。

スズ　わたしは興味ないですね。バカは黙って見ててほしいです。わたしたち以外にエネルギー問題の解決なんて出来るわけないんだから、黙って任せておけばいいんですよ。

ドウモト　言い過ぎだ。

スズ　腹割って話しただけ。あなたもそう思わない？

ドウモト　いつかは誰もが正しく判断出来るようになるとは、思う。だがそれまでは指導が必要かもしれないな。

ギンザ　おいおい、いつからボルシェビキになったんだ、筋金入りのマルキストが。

スミ　ギンザさんの仰ることは正論なんだと思うんですけど、通じないと思うんですよね。それは頭が悪いとか性格が悪いとかじゃなくて、自分で自分の人生に責任をもつ文化がないというか。いや、人生には責任を持つのかもしれないけど、社会の動きとか、そういうものは、誰か他の偉いひとに任

せてしまう、そういう文化が染み付いてるんだと思うんです。ここのひとたちがそういうひとかは分かりませんけど。ただ情報を与えて、それを正しく判断しろって言っても、それは押し付けがましいかもしれません。答えを用意してあげたほうが、結局お互いに得られるものが大きいかもしれません。

ギンザ　スミちゃんの考え方の場合は、いつ「ニッポン無責任時代」を変えるきっかけが来るんだい。

スミ　それは、分かりません。

間。

ナマリ　もう一度聞くよ。どうだろう、公表するかね。

ギンザ　覚悟を決めてください。

テツオ　公表しましょう。

ギンザ　ドウモト。

間。

ギンザ　ドウモト。

間。

ドウモト　研究者は過酷な労働を強いられている。ぼくらがこんな愚かなミスを犯したのも、度重なる疲労、ストレスが遠因だと思う。たとえば、彼女たちのケンカがなければ、非常ベルが鳴って、放射性物質をばらまくような事にはならなかったかもしれない。だがそうなった責任を彼女たちだけに押し付けるのはお門違いだろう。

ギンザ　お前がそれを言うな。

ナマリ　たしかに、研究所がこき使いすぎてノイローゼになってるのかもしれないね。

ドウモト　そんな環境で起きた事故を、正直に報告することが正しいことなんだろうか。

ギンザ　正しいかどうかではなく、報告しなければいけないことだ。

ドウモト　ぼく個人はどうなってもいい。しかし、研究者全体の権利を守るのは、ぼくの使命なんだ。ぼくが守らないで、だれが研究者を守ってくれるんだ。

ギンザ　第三者に判断を委ねよう。そう悪いようにはされんよ。

スミ　分かってもらえないですか。正論は暴力なんですよ。

ギンザ　ぼくが暴力を。

スミ　分かってます。わたしが悪かったんです。わたしがスズちゃんを突き飛ばさなければ、こんなことにならなかったんです。それ以前に計器確認がおろそかになっていなければ、温度の変化に気づけたんです。報告書にはわたしの責任だと書いてください。

テツオ　責任者探しをしたいわけじゃないですよ。むしろ主観を交えずできるだけ客観的に、何が起こったかをありのままに、正確に報告しないとダメなんじゃないですか、ギンザさん。

ギンザ　そうだ。誰かに責任を負わせたいんじゃない。

スミ　でもわたしが悪いって思ってるんでしょう。わたしが責任を取らされるんでしょう。他のみんなはトラブルを解決した英雄でも、わたしは計器を壊した犯人じゃないですか。

ギンザ　事実は変えられんよ。

スミ　はい。

ドウモト　そういじめるな。

ギンザ　事実の確認をしているだけだ。

スズ　「公開・民主・自主」って、もう偉くなった科学者たちが決めた言葉ですよね。

ギンザ　そうだね。

スズ　自分たちの地位を安泰にしたいから言ってるように聞こえます。おこがましいですよ。

ギンザ　賛成出来ないね。しかしきみが言うとおりの動機だと仮定しても、尊く、守る価値のある言葉だと思うね。

スズ　ここがアメリカであればいいけど、「出る杭は打たれる」んですよ。

ギンザ　そうだとしても、それは事実を隠蔽していい理由にはならない。

スズ　わたしは報告していいと思ってますよ。ただ、そうしたらこの国で原子力をやっていくのは、もう無理ですね。そうやって自分で自分の首を絞めるんですよ。新しいエネルギー源の開発を止めて、日本中が苦労すればいいんです。戦争だってそうだった、半年分の計画だけたてて、あとは真っ

白。エネルギーを確保するための戦争でエネルギー不足になるなんて、バカもいいところですよ。挙句の果てに、だれも戦争がしたかったわけじゃないとか言い出すんです。政治家も、軍人も、国民も。じゃあ誰が戦争をはじめたんですか？　そういう国ですよ、ここは。なんとなく周りの顔色をうかがって、一番無難な選択をして、部分最適を突き詰め続けて袋小路に嵌り込むんです。腹割ってくださいよ。わたしたちエリートが考えないでどうするんですか。ここに来るまでバカばっかりでうんざりしてたでしょう。正直、日本のエネルギー政策がどうなろうとどうだっていいです。でも、研究をしたい。研究をさせてほしい。そうしたら、この国をエネルギー問題から開放してあげますよ。利害は一致してるでしょう。わたしこんなつまらないことで、研究ができなくなるのは嫌です。

間。

ギンザ　冗談きついぜ。

ナマリ　ギンザくん、あとは君だけだよ。

ギンザ　班長にモラルはないんですか。

ナマリ　人間はみんな考えも大切なものも違うんだ。互いの違いを認め合わなきゃいけない。きみのモラルとわたしのモラルは違う、それだけだよ。

ギンザ　テツオ、報告するぞ。

テツオ　はい。

ナマリ　テツオくん。先輩のためだと思って、一肌脱いではくれんかね。ギンザくん、後輩のためだと思って。わたしは責任をとって辞めるから、このとおり。（頭を下げる）

ギンザ　ぼくは、本当に、あなたのそういうところ嫌いじゃないです。でも、これぼっかりは駄目です。いまここで、いまここで、事故を隠すような真似をしたら、これから一生、そういう真似をしなけりゃいけなくなりますよ。

ドウモト　それはきみのことか。

ギンザ　ぼくも、この研究所も、この国も、です。そしてぼくは、そういう臭いものに蓋をする考え方が、国民一人ひとりが都合の悪いことをなんとなく誤魔化して悪びれないところが、この国を戦争に向かわせたんだと思ってる。

テツオ　ぼくは。

間。

テツオ　みなさんに従います。

ギンザ　ぼくは辞めますよ、ここを。辞めて告発します。

ナマリ　わたしの後任には、君を推薦したいと思っているんだ。

ギンザ　無駄ですよ。

ナマリ　お母さんの原爆症の治療、大変なんだろう。ここを辞めたらどう面倒をみるつもりだい。いや、ぼくに任せてほしいだけだ。他意はないよ。

ギンザ　卑怯ですね。

ナマリ　わたしはきみの役に立ちたいんだ。ここに残ってくれないか。きみほど優秀で、正義感溢れる研究者は二人といない。

ドウモト　ギンザ、すまない。

ギンザ　ドウモト、まだ間に合う。

ドウモト　すまない。

ギンザ　一生後悔するぞ。

ドウモト　だろうな。

ギンザ　これが最後のチャンスだぞ。

ドウモト　ギンザ。ぼくの最後のチャンスは、もうずっと前に掴み損ねてしまったよ。ずっとずっと前だ。ぼくは研究者としちゃ二流だ、ここの誰にも敵わん。死ぬまでここにぶら下がるよ。

間。

ギンザ　テツオ、きみはどうする。

テツオ　ぼくは。ぼくは。分かりません。

ギンザ　そうか。（ナマリに）母の面倒は自分でみます。

ナマリ　やらせてくれ。きみはそう言うが、せめて、次の仕事が見つかるまでは面倒をみさせてくれ。

ギンザ　時間なので、巡回に出ます。

ギンザ、退場。

ナマリ　テツオくん、一緒に巡回して。
テツオ　はい。

テツオ、退場。

ドウモト　情報を公開しないとして、事故が発覚する懸念点はいくつか考えられます。燃料を調べるときに、つじつまのあわないことになります。
スズ　燃料棒を抜くのは発電が終わってからですよね。誤差があっても原因や時間までは特定できない可能性が高いです。
ドウモト　そうであれば。ただ、ここにいる全員が口裏を合わせれば、誰にも気付かれずに済むか。
スミ　記録紙はどうするの。
ドウモト　機材トラブルとして報告すればいいさ。
スミ　じゃあそれもわたしの責任にしてください。機材を壊したのは本当ですから、ひとつがふたつになったところで。
ナマリ　うん。じゃあ、今夜のことは、そういうことで、いいかな。
ドウモト、スズ、スミ　はい。

六場

場面は四場のつづき、談話室に戻っている。

テツオ　超臨界の原因は、工学的な問題でした。日本独自の仕様になっている制御棒の昇降装置に設計ミスがあったことが原因です。いまは解決しています。
リン　ひどい。事故よりも、事実を隠そうとしたことが許せません。
テツオ　ぼくは一度、隠すことに納得しました。研究が行き詰まるのは嫌だったし、みんなを助けたいと思いましたから。いや、違いますね。みんなに嫌われるのが怖かった。自分が正しいと思うことをして、非難されたくなかったんです。
リン　うちの生徒たちが被曝してるのよ。
テツオ　それは、すみません。
リン　あなたが謝って済む問題じゃないでしょう。

テツオ　お言葉ですが、健康被害が出る可能性は極めて低いです。

リン　年間一ミリシーベルトを越える線量ですよ。

テツオ　最新の放射線医学では、年間一〇〇ミリシーベルト以下の放射線量では有意な健康被害の例はないと言われています。計算しましたけど、多めに見積もって、年間五ミリシーベルトは越えません。

リン　行政指定の五倍じゃない。

テツオ　行政指定がすべて合理的なわけではないですから。むしろ一ミリシーベルトにこだわることで、過剰な安全対策や、いわれのない放射線差別につながるので、変えたほうがいいと思います。

キンシロウ　だが、決まっている義務を怠ったことになるね。

テツオ　それは、そうですね。

間。

テツオ　ぼくはこのことを公表して、みなさんの意見や第三者の調査があって、その上で、このみんなで研究を続けたいと思います。

ドウモト　本気かよ。

テツオ　お願いします。やらせてください。

リン　あなた長崎を見たことがあるの。あの美しかった町が、町が、焼け焦げた死体と瓦礫の山よ。

ナマリ　思い出したくないですな。

リン　あなた知らないでしょう。

ナマリ　わたしは広島に入りましたよ。（間）八月八日に。仁科のオヤジについてね。そりゃあひどかった。市内の病院はどこもいっぱいか、消し飛んでいるかで、大やけどを負った人たちが、まともな手当も受けられずにいるんだよ。これはさすがに死体かな、と思ったひとも生きてるんだ。水を欲しがってね。だが、もう助かる見込みがない人には、なにもしてあげられないんだ。まだ生き残る可能性がある方を優先するからね。傷ついた人を助けられないっていうのは、つらいもんだよ。あれは思い出したくない。一番忘れられないのは、においだね。あんなにおいはなかなか。（間）だけど原爆と原子力発電は違います。（テツオに）若いってことはバカでもいいってことにはならない。

キンシロウ　（テツオに）ぼくがアメリカの軽水炉を導入したいと思っていても、止め

ろと言うのかい。

テツオ　止めろとは言いませんが、本命はあくまで核融合です。

キンシロウ　ぼくはエネルギーが欲しい。それが今やるべきことだ。だが、その前にプルトニウムが必要だ。

リン　そんなもの持っちゃ駄目。

キンシロウ　何度も言うように、原爆を作る気なんかさらさらありませんよ。

リン　政治家の言うことなんか信じられません。

キンシロウ　それじゃ、会話になりません。

リン　戦争をはじめたいと公言する政治家がいるんですか。みんな戦争はやらない、軍備は拡張しない、そういいながら外堀を埋めていくんじゃないですか。

テツオ　プルトニウムがほしいということなら、黒鉛炉はもう建っているんですから、あれが稼働すれば十分だと思います。

リン　そうして核兵器で武装するのね。

テツオ　ぼくらは核兵器なんて作りません。

リン　もし、事故のことを秘密にする代わりに作れと言われたら、あなた断れるの。

テツオ　日本人として、核兵器は作れません。

リン　あなたはそうかもしれないけど、ここには日本人である前に科学者であるようなひとがいるんじゃない。

スズ　たしかに。わたしは作れますね。

リン　ほら。

スズ　爆弾が問題なんじゃないでしょう。それを使う人間の問題です。

リン　持ってるものは使いたくなるものだわ。

ドウモト　先生は原子力にまつわるものはすべてない方がいいとお考えなんですか。

リン　そうです。原子爆弾にしろ、原子力発電所にしろ、人間には過ぎたものです。

スミ　そういう、科学をすべて否定するような考えは不健全です。二〇〇年前とくらべて、世界の人口が増えて平均寿命も伸びているのは何故ですか。科学の進歩があるからですよ。殺す力より生かす力のほうが強いんです。

リン　それはそうでしょう。だからこそ、科学者がモラルを持たないといけない時代になったんです。自分たちの技術がどれだけの人を殺すのか、考えないといけない時代になったんです。

スズ　技術に善悪はないんですよ、だからモラルを問うのは無意味です。政治の問題です。

リン　それは時代遅れの発想よ。これからはモラルある開発で持続可能な社会をつくらなくてはいけないの。

スズ　そんな浅はかなヒューマニズムの行き着く先は、貧乏人から死んでいく高コスト低サービスの社会でしょ。人間のモラルなんか期待しないで、バカなことをしでかす前提でシステムを組まないと。だから政治の問題です。

ナマリ　先生、お説いちいちごもっとも。まさかお二人とも、この跳ねっ返りの言葉を真に受けてはいませんよね。

リン　線量計の数字は動かぬ証拠でしょう。

ナマリ　その線量計っていうのは、どんな線量計ですか。

リン　うちの工学部出の教員が作った、信頼できるものです。

ナマリ　それは、証拠としてはいささか、その、心もとないですな。

リン　テツオくんが告発してるじゃないですか。

ナマリ　彼はノイローゼなんです、大阪からこっちにきて半年、がむしゃらにがんばりすぎて疲れてしまったんですな。確かに、わたしたちは先週、あぶないところで危機を乗り越えました。それがショックだったんでしょうね。ありもしないことをわめくようになってしまった。

テツオ　ぼくは本当のことを言っています。

ドウモト　証拠はあるのかい。

キンシロウ　ぼくは、とても貴重なお話が伺えたと思って、感謝しております。

リン　あなた彼らの味方をするつもりですか。

キンシロウ　ぼくには難しいことは分からん。原子力の何が本当で何が嘘なのかなんてことは見当もつかん。しかし、誰が嘘をついて、誰が本当のことを言っているのかは分かるつもりだよ。

リン　真実を語っているのはテツオくんです。

ドウモト　なぜそうお考えですか。

リン　目を見れば分かります。

キンシロウ　あなたはそういうお考えであっても、ぼくがどう考えるかどうかはぼくが決めることだ。（ナマリに）この研究所にはじめて予算が下りた時のことは覚えていますか。

ナマリ　ええ。わたしはこれで仕事が増えるなと思いましたが、オヤジなんかはずいぶん腹を立てていましたよ。寝耳に水だ、どこにそんな準備があるん

だ、原子力の前に原子核の研究をないがしろにするなど砂上の楼閣もいいところだ、って。

キンシロウ　だが、あれから一〇年足らずで、原子力発電まであと一歩のところまで近づいた。この進歩は、あのとき予算を取ったからだと思いませんか。

ナマリ　もちろんそうでしょう。

キンシロウ　遠い未来のことは科学者の皆様にお任せして、ぼくら政治家なんかは黙っておくに限ります。だが、一〇年二〇年の間で、国民の幸福ために何が出来るか、金をどう使うのか、どんな政策を実行するのか。そういったことは黙って信じてついてきてもらいたいですな。

ナマリ　はあ。

キンシロウ　なにしろ一回の訪問で大きな政策を決めたりはしませんよ。

テツオ　事故のことは、公開するんですよね。

リン　公の場で議論すべき問題です。

キンシロウ　さて、あなたがた二人が新聞社に赴いたとして、どうなりますかね。面白おかしく書き立ててくれるかもしれないが、望む結果になるのかどうか。

リン　あなたも同じ穴のムジナですか。

スズ　あんまり、意固地にならないほうがいいですよ。

ドウモト　え？

スズ　この研究所からこの先生がなにを持ちだそうとしてるのか知ったら、みんなそんな神妙にしていなくてもいいと思うな。

ドウモト　止めろよ。

スズ　探られたくないことって、誰にでもあるんですよ。

ドウモト　頼むよ。

スズ　そういうことちょっとずつ抱えて生きていくのが人間でしょう。（テツオに）このバカはそれが分かってないからなあ。

テツオ　ええっ。

スズ　全然分かってないよ。自分のちっちゃい正義感が、わたしたちの生活に、科学とこの国に、どんな影響をあたえるかなんてこと。

テツオ　分かります。

スズ　分かってない。その正しさっていうのは、誰が得するの。ここのひとたちでも、村民でも、国民でもないでしょう。あなただけじゃない、正しくて得するの。

テツオ　透明であるべきですよ、ぼくたちは。

スズ　限度があるでしょう。ほんとに全部透明にしてどうするの。
テツオ　ウソついていい範囲なんて、当事者には定めようがありません。
スズ　ゲーム理論も知らないの、バカ。
リン　それはあなた、事故があったと認めたってことよね。
スズ　だからあなたオールドミスなんです。
リン　な。
スミ　自分だって結婚してないじゃない。
スズ　わたしは結婚なんて望んでない。恋愛感情なんてホルモンバランスの見せる幻想だし、結婚制度なんて古い社会の遺物。
ナマリ　まあまあまあ、きみたち、先生はあくまでお客さまだ、それを忘れちゃいかん。
スズ　わたしには後ろめたいことなんてなんにもない。人体に無害な放射線漏洩がなにさ。パートナーのいる男と寝たからなにさ。そんなこと、実験と研究の日々に比べたら無意味だわ。キンさん、わたしに任せてよ。わたしなら安全な原子力発電が開発できる。だから研究させてよ。人類にとって本当に役に立つものを作るから。
ドウモト　反吐が出る。
スミ　かわいそう。
スズ　うらやましいくせに。
スミ　孤独は毒ね。
テツオ　ぼくは、みなさんがなんの話をしているのか、全然分かりませんけど、自分がなにか、大変な勘違いをしているかもしれないと思っています。そして、自分は頭がいいつもりでいたんですが、ここにいるひとたちのことが、何一つ分かっていないんだということに、気がつきました。
ナマリ　よく気がついたね。いまからでも遅くない、先生にあの話は気が動転してたんだと言いたまえ。
リン　駄目よ、正気になって。
ナマリ　そう、正気になるんだ。
テツオ　正気って。
リン　もうテレビなんていりません。オリンピックが見られるように、研究所のテレビを入れ替えてもらって、古いものをいただけるように頼んでいました。
スズ　自分で言っちゃった。

スミ　横領じゃないですか。
リン　もうお断りします。同じ日本人として恥ずかしい。
ナマリ　どういうことですか、まさか原子力の研究をしていることですか。
リン　失敗を隠してのうのうとしていることがよ。
ナマリ　自分は間違ってないつもりですか。わたしらと一緒ですよ。
リン　テレビは、子どもたちのために――
ドウモト　子どもたちのためにといえばなんでも許される、と思ってるおめでたい連中っているよな。
スミ　我が身可愛さで隠したりしません。みんなこの国のエネルギーをなんとかしたいんです。北国の冬を知ってますか。知らないでしょう。暖房がないと死んでしまう。先生には想像できないでしょう。世界からいつ石炭石油がなくなるか分からないんですよ。五〇年、研究によっては二〇年でなくなるかもしれないと言われてるんですよ。石炭石油がなくなったら、どうするおつもりですか。どうしたらいいんですか。雪国の人間はみんな死んでもいいんですか
リン　それとこれとは別の問題でしょう、事故を隠していい理由にはなっていません。
スミ　そんな証拠はありません。
リン　恥を知れ。
スミ　知ってます。一〇年前に原子力があれば、うちの兄だって弟だって死なずにすんだかもしれないんです。それを忘れることが恥です。そういう思いを次の人間たちにさせないという決意を、忘れることが恥です。横領は恥ではないですか？
リン　恥です。わたしも同じ穴のムジナです。でも、ギンザさんのためにも。
ドウモト　ギンザになんの関係がある？
リン　この事実を隠蔽するために、辞めさせられたんでしょう。名誉を回復しなくては。
ドウモト　そうか、そういうことか。
ナマリ　テレビなんていくらでも持って行ってくださいよ。
リン　結構です。
ナマリ　そういわずに。どうせ余るんだ。持って行ってください。
ドウモト　あんたギンザに惚れてたんだろう。
リン　違います。

ドウモト　おかしいと思ったぜ、なんで一人でこんな、専門家の中で必死に喋ってるのか。なんだそういうことかよ。

リン　違います。

ドウモト　お笑い草だぜ、あんた、正義の味方みたいな面して、結局私利私欲で動いてるんじゃないか。

ナマリ　やめんか、無礼者。先生。うちのが失礼をしました。

リン　はい。あとは公表してくれれば。

ナマリ　うちの娘は学校で、ご迷惑をかけていませんか。

リン　ええ、とってもいい子で。

ナマリ　いつも生傷がたえないんです。今年になって呼び寄せたのは失敗だったかしら。先生、うちの娘は大丈夫ですか。

リン　四〇人も人間がいて好き勝手生きてるんですよ、暴力があれば説教しますし廊下にも立たせます、でも見逃すことだってありますよ。

ナマリ　そう、人間ですからね。わたしたちも同じです。完璧には振る舞えません、原子たちのようには。

テツオ　そう、人間に、こんなもの扱えるんですかね。

間。

キンシロウ　扱えるよ。

テツオ　そうですか。でもあなた素人ですよね。

キンシロウ　政治家は政治以外のあらゆる分野の素人だが、素人として専門外の問題を解決する専門家だ。さて、原子力は人間に扱えるか、という問題だがね。問題設定が間違っとるんだよ。ところで、みなさんは大変に美しいですな。日本人の鑑です。それがいかんのですな。

テツオ　分かりません。

キンシロウ　原子力は人間に扱えるか、という問題設定は、人間をどう定義するかで結論が違ってくるのさ。

スズ　賢い人間とバカってこと。

キンシロウ　君らしいご意見だが、論理的な思考力が如何に優れていようと、限界がある。一人の人間ができることには限界があるんだ。それなのに、ぼくらは往々にして、ローカルヒーローを作ってしまう。ローカルヒーローってのは、その集団の中での最適化された人間ってことだな。ある集団ではたい

へん効率的に活動できるが、一歩外の社会にでるとたちまち適合できなくなる。

テツオ　軍人は軍隊の中では優秀でも、政治や商売になるとダメだってことですか。

キンシロウ　よく分かってるじゃないか。

テツオ　父が海軍なんで。戦争が終わっていろいろやってみていますけど、上手くいってないです。

キンシロウ　ローカルヒーローは、他の場所では決して成功できんのだよ。なぜか。あまりに所属する集団に慣れてしまって、そこで硬直化するからだ。そう、まさにいまの君たちのようにね。必要なのは、ローカルの枠を越えたヒーローです。枠組みを超え、いくつもの集団の特異性も理解し、世の中の仕組みともちゃんと折り合えるヒーローがいればいい。能力のある人間を流動的に行き来させ、あらゆる事態に対応できる柔軟性を担保する。そうすれば原子力みたいな繊細なテクノロジーも――

テツオ　違います。ヒーローは邪魔なんです。枠を越える人間たち、それはヒーローじゃなくていいんです、むしろヒーローじゃ駄目で。月光仮面じゃなくて鉄腕アトムじゃなくて、ぼくや、あなたや、ここにいるみんなです。みんなが力を合わせる、欠けている能力を補い合う、そうすることで一人ではできない、ヒーローを越える活躍ができるようになるんです。

スズ　何言ってんのか分かんない。

ドウモト　つまりマルキストだね。

スズ　バカが何人集まってもバカでしょ。

ドウモト　万国の労働者よ、団結せよ、ねえ。

スミ　その割に運動がローカルになるのはなぜなのかしらね。

リン　わたしたちの遺伝子がそうなってるんじゃない。

スズ　遺伝子学的に証明されているの。

リン　科学というより、哲学ね。日本人は一四〇〇年前から、同じ文化、同じ風習で生活して、強烈な同調圧力の中、望んでタコツボに集まるようになってるのよ。

スズ　面白い。

リン　いままではそれで上手くいっていた。でも、これからは分からない。

ナマリ　（キンシロウに）なんで楽しそうなんですか。

キンシロウ　おや、楽しそうに見えますか。

ナマリ　だから、なんで楽しそうなんですか。

キンシロウ　悲しいんですよ。こんなに美しいひとびとに、悲しい思いをさせると思うとねえ。

テツオ　あなたは、軽水炉を進めて、プルトニウムがつくれれば、いいんじゃないんですか。

間。

キンシロウ　ぼくは大学野球をやっていてね。ギンザは同期だ。

ナマリ　彼はわしらをどうしろと言ってたんですか。

キンシロウ　なにも。あいつは何も言いませんでした。そういうやつです、昔からよく喋るやつでした、つまらない冗談ばかり言ってね、肝心なことはなにも喋らないんだ。

ナマリ　本当に、あんなに優秀な研究者は二人といません。

キンシロウ　ただ、あんなに泣いて悔しがるさまははじめて見ましたね。よほど研究に未練があるんでしょう。原子力発電こそ、この国を本当の意味で自由にする鍵だと信じていましたから。

間。

リン　テツオくん、ギンザさんは最後になんておっしゃったの。

テツオ　最後、最後は。黙ってチキンラーメンくれました。

間。一同がっくりくる。

スズ　わたし帰っていいですか。

スミ　ダメよ練習あるもの。

スズ　すさまじいですね、リンさん、演劇の練習ですって。

リン　やる。

スミ　（出ていこうとするドウモトを止めて）逃がさん。

キンシロウ　ほう、ぼくにもなにか役をくれよ。

スミ　はあ。じゃあ、桜を。

キンシロウ　心得た。

ナマリ　これは夢かな。

テツオ　夢ですね。間違いなく。

ナマリ　テツオくん、時間を巻き戻したいと思ったことはあるかい。

テツオ　あります。いま巻き戻しています。

ナマリ　わたしはね、ないのよ。そりゃたくさん失敗もした。上手くいったことよりも上手くいかなかったことのほうがずっと多い。でも不思議と、巻き戻したいと思ったことはないんだ。

テツオ　はあ。

キンシロウ　まったく美しいひとたちです。嘘をついているひとが誰もいない。ということは、事故はあった、ということでしょう。

間。

ナマリ　いまはじめて、きみを殴ってでも止めておけばよかったと思ってるよ。

間。

キンシロウ　知ってしまったことは、知らなかったことにはなりません。

ナマリ　わたしのクビだけで収まりませんか。

キンシロウ　ぼくがすることは、世間に公表することだけです。あとは世論が決めることですが、大変に厳しいでしょうな。

スズ　キンさんは、それでこの国のエネルギーは大丈夫だと思っているの。

キンシロウ　エネルギー問題の行く末を国民が決める、これは民主主義の理想的な形だと思いますよ。

リン　保守党は石油利権が大きいからね。原子力発電が面白くない人だってたくさんいるでしょう。

スミ　あんたみたいな人間が石油の値段を上げてるんだ。

リン　あなた原子力の研究をつぶすために来たのね。

テツオ　ええっ。

キンシロウ　つくづく、自分のお気に召さないことには、何か裏のからくりがあると思い込みたいようですな。

リン　だから嫌いだよ。自分はお国のために一所懸命だみたいな面で。炭鉱を捨てさせて、原爆を落とさせて、美味しいところは全部東京に持って行っ

て。

キンシロウ　だとしたら、同じ目的で行動するのは皮肉なものですな。ぼくは原子力をやめさせたい、あなたも原子力をやめさせたい。

テツオ　話が違うじゃないですか。

キンシロウ　ぼくはただ、この国に良かれと思ったことをするだけだよ。

テツオ　ギンザさんは、キンシロウさんが原子力を止めるって知っているんですか。

キンシロウ　二度と戦争などしない国にする。そのためにはなんでもやるよ。

テツオ　カッコいい風に言ってますけど、クズですよね。

キンシロウ　美しい人間たちだけで地球が回っていると思うかね。

リン　聞いちゃ駄目よ、また詭弁だから。

キンシロウ　社会というのは桜の木のようなものなんだよ。美しい花を咲かせる部分もあれば、泥にまみれてしっかり根を張る部分もある。花が根を軽蔑するのは、桜としてはいかがなものだろうね。

テツオ　泥が汚いと思いません。ひとを騙すのは汚いです。

キンシロウ　テツオくん。きみはそれを、死ぬまで言い続けることが出来るかい。泥を汚いと思わず、ひとを騙すことを汚いと思い、透明な環境を作り、正しいと思ったことをあきらめずにつづけるかい。

テツオ　はい。

終幕

序幕と同じ時間と場所で、別の未来。

じじい　そうして、この国の原子力政策は根本的に変わっていったんじゃ。

ナマリ　「公開・民主・自主」の原則にもとづき公開された「動力試験炉超臨界事故」は、関係者への処分があったにも関わらず、そして実質的な住民の健康被害は無かったにも関わらず、激しい反原発運動に展開していった。

スミ　そこにはさまざまなデマが織り交ぜられ、わたしは自分の夢を忘れた。

ドウモト　組合は必死に雇用を守ろうとしたが、内部での対立すらまとめられず、解雇される研究者を黙って見送ることしかできなかった。

リン　核分裂を用いた発電所は作られなかった。

スズ　核融合の基礎研究に莫大な投資がされ、主任研究員としてテツオが着任し、わたしは研究所を辞めた。

じじい　わしはがんばったぞ。粉骨砕身がんばった。
キンシロウ　しかし。
ナマリ　二〇年たっても、三〇年たっても、核融合は実現されなかった。
スミ　オイルショック。火力発電に頼った日本の電気代は爆発的に増加した。
ドウモト　賃金はあがらず物価は上昇し続け、労働運動は徐々に過激な色合いを増していく。
リン　日米安保の更新を機に残存するプルトニウムとウランをすべて外国に譲渡、スリーマイルとチェルノブイリの事故を経て、原発の停止を英断とする声はますます高まる。
スズ　ベルリンの壁崩壊。核融合はまだ出来ていない。
じじい　腹が減ったな。ばあさんはどこじゃ。
サンコ　おじいちゃん。おばあちゃんの葬式だったでしょ。
じじい　ええっ。イチコとニコはどこじゃ。
サンコ　おじいちゃん。
イチコ　わたしは去年結核で死んだよ。
ニコ　生まれたばかりの時に、喘息で死んだよ。
じじい　ええっ。
ニコ　病院が停電していて、お医者さんがいても何もできなかった。もし呼吸器が使えていれば助かったかもね。
サンコ　姉ちゃん、会いたいなあ。
じじい　ええっ。
サンコ　今日は元気だねえ。

遠くから爆発音が聞こえる。一発、二発、三発。

じじい　何の音じゃ。
サンコ　空爆でしょ。
じじい　ええっ。
サンコ　今日は遠いね。空港のほうかな。
キンシロウ　原子力禁止の厳守は、米国の原子力空母の入港拒否にいたり、日米安保は更新されず、米軍基地は順次撤退していく。
ナマリ　深刻な電力不足は製造業を圧迫し、外国への輸出計画はしぼんでいく。
スミ　外貨を獲得する手段の乏しい日本は、石油さえも満足に購入できなくなっ

ていく。

ドウモト　町には貧困と孤児が溢れ、治安は悪化していき、労働運動はますます活動を先鋭化、平和主義と手厚い福祉を唱えて政治家を糾弾し続ける。

リン　外国の軍隊が突然、自衛隊の攻撃を受けたと宣言して、日本の領土を占拠する。

スズ　日本には、それを押し返す自衛隊も、米軍も、技術も、金も、なにもない。核融合はまだできない。

じじい　わしはがんばったぞ。粉骨砕身がんばった。

キンシロウ　日本の領土は、半分になった。

じじい　タロウとジロウはどうした。

パパ　四年前に空爆で。即死でした。ごめんねサンコ、おじいちゃん。

ママ　パパと一緒だったけど、即死ではなかったの。即死のほうが良かったな。救急車もガソリン不足で動いてない状況で、苦しかったよ。

おじさん　おやじは間違ってたよ。ワケの分からない核融合なんてものに手を出さずに、いまできる技術をこつこつ積み上げればよかったんだ。

じじい　すまない。

サンコ　なに。

じじい　サンコ、すまない。すまない。すまない。わしは、間違ってしまった。サンコ、すまない。すまない。すまない。

サンコ　おじいちゃん。落ち着いて。

おじさん　いまさら後悔したってはじまらんよ。

じじい　すまない。言うべきではなかった。やめさせるべきではなかった。サンコ、すまない。すまない。

サンコ　大丈夫よ。生きてるだけで丸儲けじゃん。

おじさん　おやじとサンコはオレが守る。長生きしろよ。

じじい　どこで、どこで間違えた。なにが間違ったんだ。

サンコ　じゃあまた、変えてみる？

ナマリ　三度目、軽水炉の開発と核融合の開発をバランス良く進めるも、技術革新の中で極度に金融工学が発達し、貧富の差が広がる。栄養失調で命を落とす子どものそばをロールスロイスで走り去る人間がいる中、富の再分配を求める共産主義革命が起こり、長期の内戦状態となる。

スミ　四度目、より現実的な軽水炉の改良を続け、核融合は成功しないものの十分なエネルギーがあり、政治経済ともに、安定した世界となる。

じじい　腹が減ったな。ばあさんはどこじゃ。
ばばあ　はい、ここにいますよ。
じじい　わしはがんばったぞ、粉骨砕身がんばった。
ばばあ　では、離縁させていただきます。いままでお世話になりました。
じじい　ええっ。
ばばあ　あなた、この四〇年わたしの顔を、正面から見たことがありましたか？
じじい　すまない、すまない。
ばばあ　そんなに研究がお好きなら、どうぞ原発と結婚なさったらいいんです。
じじい　わしはお前のために、お前たちのためにがんばったんじゃ。
サンコ　じゃあまた、変えてみる？
ドウモト　五度目、再生エネルギーの開発に注目するも電力自由化に失敗、エネルギー不足の末に最貧国となり、毎年大量の餓死者を出す。
リン　六度目、膨大なエネルギー資源を手にした政府は日本帝国を復権させ、米国と核戦争を起こし国民の半数が死に至る。
スズ　七度目、核融合こそ基礎研究で苦戦するも、エネルギー開発は順調にすすみ経済的に安定するが、自由主義の浸透とともに急激に家族制度が崩壊、新しい社会への変革に手こずった結果、自己肯定感の持てない自殺者が年間一〇万人を超える。
サンコ　じゃあまた、
じじい　もう、いい。

間。いつのまにかじじいの周りに全員が立っている。

ギンザ　おつかれさん。
テツオ　ええっ。何も何も。できなかった。
ギンザ　恥じることは何もない。ただ、力が足りなかっただけだ。ぼくらにはいつも力が足りない。
テツオ　はい。すんません。
ギンザ　どうした。
テツオ　あんとき、味方できなくて。味方っていうか、自分を信じて、事件を公表しましょうって言えなくて。
ギンザ　ああ。恨んでる。人間って、そんなに尊くなれるものかね。
テツオ　分かりません。でも、なりたかったです。でも、なれなかったです。

ギンザ　ぼくもだ。テツオ。君はなんで科学者になったんだ？

テツオ　成り行き、ですかね。本当は小説家になりたかったんですけど。ギンザさんは？

ギンザ　ぼくもだ。本当はカープのキャッチャーになりたかった。なれるといいな。

テツオ　なれるといいですね。

間。

おじさん　死んでるみたいだろ。これ生きてるんだぜ。

パパ　バカ野郎。

イチコ　でも、お家で亡くなるなんて、いい死に方ね。

ママ　そうかもねえ。

ニコ　やっぱ、ばあちゃん死んでから、早かったね。

サンコ　おじいちゃん。わたしね、おじいちゃんがやってた、核融合を研究する。だってさ、おじいちゃんはバカだよ。日本を救ったとか言ってさ、事故のときはオロオロしてただけじゃない。あきらめないとか言って、結局途中で放り投げて。最後はなんか、さっぱりして、安らかな顔で死んじゃってさ。なんにも、なんにも変わってないのに。なんにも良くなってないのに。抗えばいいの？　受け入れればいいの？　違うよ、そうじゃないよ。ちょっと抵抗したり、調整なんてことは誰だって出来るんだよ。でも、続けないと、やりきるまで続けないと。途中であきらめたらダメなんだよ。わたしはおじいちゃんとは違う、わたしはやってやる。最後まで放り出したりしない、限界までやったからって満足げに死んでやらない。ていうか死なない。世界が変わるまで死んでやらないんだから。

サンコの周りをサンコの家族が取り囲んでいる。じじいの目にはかつての仲間たちの姿も見えている。サンコはなにかに手を伸ばし、しかし届かないが、それでも手を伸ばし続ける。

幕

謝辞

日本原子力研究開発機構テクニカルアドバイザー、稲邊輝雄氏には、お忙しい中未熟な台本を精読していただき、現場の研究者の立場から貴重なアドバイスを頂いた。すべてご指導通りに書き換えることは出来ず、一部「演劇のウソ」としてしまったのは、ひとえに作者の力不足である。ありがとうございました。

黒澤世莉

上演にあたって

上演許可は左記までお問い合わせ下さい。

合同会社 Level 19

電子メール　info@level19.net

発行元　黒澤世莉　二〇二一年一月二四日